

第6回 新収蔵品展

2023年5月20日（土）～6月11日（日）
実践女子大学香雪記念資料館 企画展示室1・2

武内小鸞（生没年不詳）

江戸時代後期に活動した女性画家である。名は千賀、字を左琴と言ひ、長門国（現在の山口県西部）に生まれ、京都に出てはじめは円山応挙（1733-95）の子・応瑞（1766-1829）に学び、美人画を描いたとされている。のちに岸駒（1749/56-1839）に師事し、人物図だけでなく、山水図や竜虎図も描くようになったという。以上の伝記は、岸派の画家である白井華陽（生没年不詳）の『画乗要略』（天保2年＝1831序）巻五「閨秀」の項目に掲載されており、現時点で小鸞に関する記事が確認できる唯一の資料である。当館で所蔵している小鸞画3点の画題は「唐美人」「孔雀」「虎」で、いずれも円山派ならびに岸派の画家による作例が多く現存している。そして、特に《虎図》は、虎の名手として名高い岸駒が初期に描いた柔和な虎ではなく、寛政11年（1799）頃に虎の頭部と四脚を入手してから描くようになった、筋肉質で獐犷な虎の特徴をよく踏まえて描かれており、かなり習熟しているため、小鸞の本格的な画風は岸駒に師事した頃に形成されたものと考えられる。（S）

【主要参考文献】
木村重主編『日本絵画論大成』第10巻（ベリかん社、1998年）
実践女子学園創立120周年記念特別展『華麗なる江戸時代の女性画家たち』（実践女子学園香雪記念資料館、2015年）
鈴木美有「武内小鸞筆《虎図》について」（『実践女子大学香雪記念資料館館報』第19号、2022年）

No.1

かいとう くじやくず 海棠孔雀図

18世紀末
絹本着色・軸
116.4 × 51.3cm
款記「小鸞女史」
印章「小鸞女史」朱文長方印

No.2

とら ず 虎図

19世紀
絹本墨画・軸
96.7 × 36.3cm
款記「小鸞女史」
印章「武内」「小鸞」白文連印

あともみ かげい 跡見花蹊（1840-1926）

跡見学園創立者であり、明治・大正期を代表する教育者として名高い人物だが、日本画家・書家としても活躍したことが知られている。名は瀧野、また木花と言ひ、花蹊、西成と号した。摂津国西成郡木津村（現在の大阪市浪速区）に、郷土で歌人でもあった父・跡見重敬、母・幾野の次女として生まれ、幼少期より書や画などを習った。12歳より大坂の石垣東山（1804-76）らに書画を学び、17歳で京都に出て頼山陽門下の宮原節庵（1806-85）に書を、円山応立（1817-75）・中島来章（1796-1871）、そして日根対山（1813-69）に画を学んだ。その後、大坂に戻り、安政6年（1859）花蹊19歳の頃に父・重敬の私塾「跡見塾」を引き継いだ。慶応2年（1866）に京都に移って私塾を開いた。それから4年後の明治3年（1870）に京都の私塾を閉じて上京し、明治8年（1875）神田中猿楽町に「跡見女学校」を開校した。これが、現在の跡見学園の出発点となっている。跡見女学校の絵画の授業では自ら学生の指導に当たり、教材としての手本作成に注力するなど、花蹊

の画業は強く教育と結びついていたと言える。（S）

【主要参考文献】
跡見学園女子大学 花蹊記念資料館 開館記念特別展『跡見花蹊とその時代』（跡見学園女子大学花蹊記念資料館、1995年）
跡見花蹊著／花蹊日記編集委員会編『跡見花蹊日記』（跡見学園、2005年）
仲町啓子編『江戸時代の女性画家―実践女子大学香雪記念資料館所蔵女性画家作品図録―』（中央公論美術出版、2023年）

No.3 2022年度新収蔵品

もうこのず 猛虎之図

19世紀後半～20世紀初期
絹本墨画淡彩・軸
124.7 × 71.1cm
款記「花蹊女史」
印章「跡見」白文長方印、
「華溪女史」朱文長方印



のぐちしょうけい 野口小蕙（1878-1945）

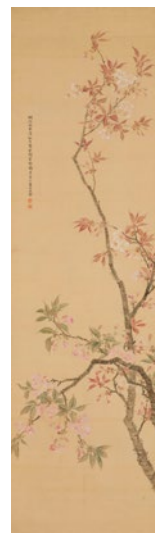
南画家・野口小蕙（1847-1917）の娘として生まれる。名は郁。小蕙と号した。幼い頃より母・小蕙に絵を学び、明治25年（1892）には弱冠14歳にして日本美術協会秋季美術展へ《少女観月図》を出品、幼年生褒詞に選ばれる。以降、同展へ明治35年まで毎年出品し、明治31年の《玉蜀黍図》、32年の《秋草七種図》、33年の《秋園錦繡図》、34年の《春曉晴色図》、35年の《芙蓉》と5年連続で褒状一等を受賞した。さらに明治37年には、《秋山暮靄図》で三等賞銅牌となっている。また、明治31年には第1回日本画会展へ《秋山烟靄図》を出品、当選百画に選ばれる（以後も8回当選）。明治33年にはバリ万国博覧会へ《秋草七種図》を出品、同年6月には日本画会展へ行啓した皇后の御前で、佐久間棲谷（1868-?）や武村耕靄（1852-1915）、跡見玉枝（1859-1943）ら他の女性画家たちとともに揮毫を披露する。大正2年（1913）、宮内省の下命による夏用風炉先屏風を揮毫。その後、母・小蕙の逝去をはさんでしばらくの間、展覧会への出品は見られなくなるが、大正10年には高島屋で開催された現代作家新作展へ対幅の《松竹梅》を出品。日本美術協会展へも大正12年より出品を再開する。昭和6年（1931）の第87回美術展覧会には、それまでの画風を一変させ、新たな画境に挑んだ作品《閑庭秋色》を出品。翌昭和7年の第90回美術展覧会にも、同様の傾向が窺える《秋園錦綉》（山梨県立美術館蔵）を出品した。（T）

【参考文献】
平林彰「野口小蕙試論」（『山梨県立美術館研究紀要』第33号、2021年）

No.4 2022年度新収蔵品

おうか ず 桜花図

明治29年（1896）
絹本着色・軸
120.6 × 34.0cm
款記「明治丙申清和月寫於閑雲野鶴草堂小蕙女史郁」
印章「郁印」白文方印、
「小蕙女史」朱文方印



栗原玉葉（1883-1922）

長崎県南高来郡山田村（現在の雲仙市吾妻町）に宅を構えていた栗原宰、クマ夫婦のもとに生まれる。本名アヤコ。梅香崎女学校在学中に受洗。また同校で図画を教えていた大久保玉珉（1874-1949）らに絵の才能を見出され、画道へ進むよう奨励される。明治40年（1907）、私立女子美術学校高等科へ入学。また寺崎広業（1866-1919）に師事する。明治42年に同校を卒業後は、美術研精会展や巽画会展へ出品。大正2年（1913）の第7回文展へ旅芸人の少女を描いた《さすらひ》で初入選を果たす。以降《幼などち》（第8回展）、《お鶴》（第9回展）と幼い女の子を題材とした作品で連続入選を果たすが、おなじく幼い女の子を主題とした《舞台の裏》が第10回文展で落選となる。大正6年、玉葉は新たな題材を求めて朝鮮半島へ写生旅行に出かけ、同地の女性像を主題とした《身のさち　心のさち》で第11回文展に再入選を果たす。大正7年の第12回文展では、江戸時代にキリスト教を信じ処刑された遊女・朝妻を描いた《朝妻桜》で入選。翌年には広業が亡くなり、松岡映丘（1881-1938）の門へと移る。同年の第1回帝展では、他の女性画家とともに、日本画の研究団体・月耀会を結成、大正9年6月に第1回展を開催した。大正10年には第3回帝展に《清姫物語》で入選。同作は翌11年にフランス・パリで開催されたソシエテ・ナショナル・デ・ボザールにも陳列された。（T）

【主要参考文献】

五味俊晶編『栗原玉葉』（長崎文献社、2018年）

No.5　　2022 年度新収蔵品 きょうの ゆう 京乃夕 大正時代 絹本着色・軸 128.3 × 41.4cm 款記「玉葉」 印章「玉葉」朱文方印

きのしたはる 木下春（1892-1973）

福島県福島市置賜町にて、味噌醸造業を営み、市会議員も務めた木下銀助の長女として生まれる。福島県立福島高等女学校を卒業後、20歳の頃に結核を患い、神奈川県・平塚の佐々木杏雲堂平塚分院で療養。このころ、前田青邨（1885-1977）や俳人・富安風生（1885-1979）と知り合う。快癒後、大正8年（1919）に前田青邨に師事。翌大正9年の再興第7回院展に《秋草》で初入選を果たす。大正10年には再興第8回院展に《桃》が入選、院友に推挙された（のちに特待となる）。また、同年4月に白木屋呉服店で開催された蒼空邦画会第1回展へ《秋》を出品。昭和4年（1929）の再興第16回院展には《秋苑》を出品するなど、このころまで自然の草花を主題にした作品を中心に手掛けた。昭和6年の再興第18回院展には、女性ふたりが砵を打つ姿を描いた《砵》を出品。以後《花壳》（再興第19回院展）や《土用ぼし》（再興第20回院展）、《機織》（再興第21回院展、福島県立美術館蔵）など、日常生活の一コマを切り取った女性像にも意欲的に取り組む。昭和15年頃には富安風生に正式に師事し、俳誌『若葉』同人となり俳人としても活躍。昭和17年には再興第29回院展へ、春がいつとき滞在していた鎌倉・東慶寺の開山・覺山尼を描いた《覺山尼》を出品。昭和22年の再興第32回院展へも、同寺二十世の天秀尼を描き出品する。昭和43年、『木

下春句集』刊行。同年、再興第53回院展へ、満開の梅の花に煙るお堂を描いた《梅の谷戸》を出品した。（T）

【主要参考文献】

『日本美術院百年史』第5巻（1995年）

吉村有子「福島的美術家たち④木下春」（『読売新聞』、1996年4月14日）

No.6　　2021 年度新収蔵品 もも 桃 20世紀 絹本着色・軸 122.8 × 29.6cm 款記「波留」 印章「波留」朱文長方印 持丸和久家寄贈

まよだ せいそん 前田青邨（1885-1977）

岐阜県中津市に生まれる。本名廉造。明治34年（1901）に梶田半古（1870-1917）の画塾に入門し、半古から「青邨」の雅号をもらう。明治40年に同門の小林古径（1883-1957）とともに、安田靫彦（1884-1978）や今村紫紅（1880-1916）による紅児会に入会し、研鑽を積む。大正3年（1914）に日本美術院が再興されると第1回展に出品し、同人となる。以降同院展の中心作家として活躍し、鮮やかな色彩を用いた歴史画を描く一方で、柔らかな墨の線を主体とした物語性のある作品なども描いた。

大正4年に朝鮮半島、8年に中国、11年には古径と泰西芸術視察海外研究生として約9ヶ月渡欧し、大英博物館で伝顧愷之筆《女史箴図卷》を模写する。そうした中で東洋絵画の伝統を再確認し、昭和に入ると琳派の影響を窺わせる平面性と装飾性の強い作品も発表した。戦後も歴史画を主軸に人物や花鳥、風俗、風景など多岐にわたる画題を、柔らかな筆致や鮮明な色彩、緻密な描写により制作した。

文化財保護にも尽力し、昭和25年（1950）に文化財保護委員会専門委員となり、法隆寺金堂壁画の再現模写や高松塚古墳壁画の模写を完成させた。（Y）

【主要参考文献】

岐阜県美術館、中日新聞文化事業部編『生誕一二〇年 前田青邨展』（中日新聞、2006年）
青山訓子監修、前田青邨展実行委員会編『前田青邨 究極の白、天上の碧―近代日本画の到達点―』（株式会社岐阜新聞社、2012年）

木下春（1892-1973）

No.7　　2021 年度新収蔵品 しょう き 鐘廬 20世紀 紙本墨画・軸 129.3 × 32.5cm 款記「青邨」 印章「青邨」朱文長方印 持丸和久家寄贈

No.8　　2021 年度新収蔵品 せんめんうり 扇面売 20世紀 紙本墨画淡彩・軸 33.5 × 42.8cm 款記「青邨」 印章「青邨」朱文方印 持丸和久家寄贈

No.9　　2021 年度新収蔵品 やま かちかち山 昭和2年（1927） 紙本墨画・軸 23.7 × 31.6cm 款記「丁卯元旦青邨」 印章「青邨」朱文方印 持丸和久家寄贈

なわべ せいらん 河邊青蘭（1868-1931）

江戸時代に幕府の御用銅吹業を営んでいた河邊伊右衛門の三女として、大坂・南堀江に生まれる。名は元子。青蘭のほか、碧玉、蕉雪軒とも号した。絵をはじめ巽蓼湾（生没年不詳）に学び、14歳の頃から橋本青江（1828- ?）に師事。また、書を村田海石（1835-1912）、寺西易堂（1826-1916）に、漢詩を妻鹿友樵（1826-96）について学ぶ。明治15年（1882）、第1回内国絵画共進会へ《山水》《竹》を出品。明治17年の第2回内国絵画共進会へも、《山水》《花卉》を出品する。明治23年には第3回内国勲業博覧会へ《浅絳山水》を出品、褒状となる。また同年には日本美術協会展へ《夏景山水》《四季花卉》を出品、《夏景山水》が皇后御用品となった。明治28年、第4回内国勲業博覧会へ《柳陰山水》を出品し、褒状を受賞。明治33年にはバリ万国博覧会へ《梅雀》を出品した。明治36年、第5回内国勲業博覧会へ《山水》《柳林風雨》を出品。また、同会へ行啓した皇后の御前にて揮毫を披露する栄に浴した。明治41年、惜しくも落選とはなったものの、第2回文展へ《清明雅集》《松溪訪友》の2点を送っている。大正9年（1920）には婦人世界の主催で開催された第1回女流日本画展覧会へ《墨竹》《秋景山水》を無鑑査出品。大正15年と昭和2年（1927）には大阪・長堀橋の高島屋にて個展を開催。昭和3年には東京・京橋の高島屋で個展を開催した。

師・青江が水墨画を好んだのに対し、青蘭は意識的に彩色画を手掛け、山水や花鳥を多く描いた。（T）

【主要参考文献】

宮崎法子「新収の二作品に見る河辺青蘭の画業」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第8号、2011年）

仲町啓子・宮崎法子・太田佳鈴・山盛弥生「収蔵品紹介　河辺青蘭　特集」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第11号、2014年）

No.10　　2022 年度新収蔵品 すいぼくせつしきじょう 水墨設色帖 大正7年～大正12年（1918-23） 紙本墨画、紙本墨画淡彩、紙本淡彩・画帖 9冊 ① 30.1 × 42.2cm、② 30.2 × 42.0cm、③ 30.0 × 42.3cm ④ 30.1 × 42.4cm、⑤ 29.5 × 41.6cm、⑥ 29.9 × 42.1cm ⑦ 30.4 × 42.4cm、⑧ 29.8 × 41.6cm、⑨ 29.9 × 41.7cm

はやしはいほう 林珮芳（1799-1879）

紀州藩の地主・小林栄秀の三女として生まれる。名は小蝶、字は恋花。はじめ佩芳と号し、のちに珮芳と改めた。21歳のときに医者で漢学者でもあった東夢亭（1796-1849）と結婚する。絵ははじめ、伊勢・寂照寺の画僧・月僊（1741-1809）の遺墨を手本に蘭石を学び、その後、小橋香村（生没年不詳）について山水を学ぶ。天保2年（1831）、津で開催された書画展観へ《山水画》を出品。天保11年には伊勢を訪れた江馬細香（1787-1861）を歓待するため、地元の人々が書画を寄せた《天保庚子勢遊巻》（岐阜県歴史資料館寄託）に「山水図」を描く。弘化2年（1845）には篆刻家・十河節堂（1795-1860～）が難波で催した書画展覧会に、《米法山水図》を出品。弘化3年、伊勢を訪れた長崎の画僧・鐵翁（1791-1872）より最新の中国山水画を学び、画風を大きく発展させた。『三重畫人傳』によれば、鐵翁は伊勢を訪れる以前に珮芳の絵を目にする機会を得、清の顧海蘊の山水を珮芳に贈っていたという。嘉永2年（1849）に夫・夢亭が亡くなると、その遺稿刊行に尽力。安政4年（1857）に制作された《山水図巻》（当館蔵）には、夢亭と交友関係のあった儒者・漢学者の斎藤拙堂（1797-1865）が題を、漢詩人・小野湖山（1814-1910）が跋を記している。晩年には女子を集め、習字や裁縫、国文などを教え、もっぱら家庭学の教授を行ったという。（T）

【主要参考文献】

我妻榮吉『三重畫人傳』（1915年）

仲町啓子「江戸時代の女性画家の研究―実践女子大学香雪記念資料館所蔵品を中心に―」（『江戸時代の女性画家―実践女子大学香雪記念資料館所蔵女性画家作品図録―』、中央公論美術出版、2023年）

No.11 さんすい ず かん 山水図巻

安政4年（1857） 紙本墨画淡彩・卷子 26.6 × 293.2cm 款記「丁巳初秋寫　珮芳」 印章「佩芳」朱文方印

はしもとせいこう 橋本青江（1828-?）

資産家の娘として、大坂・船場に生まれたと伝えられる。名は瑩。字を紫玉という。絵を岡田半江（1782-1846）に、書を篠崎小竹（1781-1851）に学ぶ。慶応3年（1867）から翌明治元年（1868）にかけて、兵庫・宝蔵寺にて襖絵などを制作。また、慶応3年には娘・總子（号・青蘋）が生まれる。明治13年には朝鮮公使・花房義質（1842-1917）が主催し、東京・飛鳥山にあった渋沢栄一（1840-1931）の邸宅で開かれた宴席において席画を披露。明治15年には第1回内国絵画共進会へ《住吉真景》《梅竹》《秋景山水》《米法山水》を出品する。明治21年、矢野五洲（1846-1907）や行徳玉江（1828-1901）、森琴石（1843-1921）らにより結成された南画の研究団体・機到会に客員として参加。明治23年には第3回内国勲業博覧会へ《秋景漁樵問話図》を出品し、褒状を受賞した。明治26年、アメリカ・シカゴで開催されたシカゴ・コロンブス万国博覧会へ《花卉図》を出品。明治35年9月2日付『読売新聞』には、青江が翌年の博覧会へ向け鋭意制作中である旨が報じられるなど、晩年まで制作をつづけた。

中国の文人文化に強い憧れを抱き、自ら文人たらんとして生きた青江は、売るための絵を描かず、水墨の作品を好んで描いた。また、青江に教えを受けた者も多く、娘・青蘋や河邊青蘭（1868-1931）のほか、野崎柳江（1871-1927）や香川芝香（1872-1953）らが知られ、さらに明治15年9月19日付『朝日新聞』は、青江門で当時、多くの少女たちが絵を学んでいたようすを伝えている。（T）

【主要参考文献】

山盛弥生「橋本青江「山水図」について」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第7号、2010年）

田所泰「橋本青江筆《連璧帖》について」（『実践女子大学香雪記念資料館館報』第19号、2022年）

宮崎法子「橋本青江の画業について初探」（『実践女子大学香雪記念資料館館報』第20号、2023年）

No.12　　2022 年度新収蔵品 しょうけいようかく ず 松溪養鶴図 明治13年（1880） 続本墨画淡彩・軸 123.3 × 39.7cm 題「松溪養鶴」 款記「庚辰重陽日敬寫奉賀梅皐老公古稀榮壽即希　政之　青江女橋瑩」 印章「喬瑩私印」白文方印、 「青江」朱文方印、 「山靜似太古」白文長方印・遊印

いけだ せいけい 池田青溪（1884-?）

備後福山にて池田清謙の長女として生まれる。《青緑河橋新柳図》（当館蔵）や《青緑山水図》（個人蔵）における「池田愛印」白文方印の使用から、名を愛といったものと思われる。幼少より絵画に親しみ、河邊青蘭（1868-1931）に南画を学ぶ。のちに水田竹圃（1883-1958）にも師事。19歳の折には昭憲皇太后の御前揮毫を務めるなど、早くからその才能を発揮した。大正11年（1922）には竹圃らにより創立された日本南画院の第2回展覧会へ《秋郊帰牧》を出品、以後同展へ、《緑陰》（第3回展）、《住吉橋》（第4回展）、《恩智村》（第5回展）、《木曾》

(第8回展)を出品した。大正13年には、江戸時代の儒学者・藤澤東咳(1795-1865)が開き、南岳(1842-1920)、黄鵠(1874-1924)、黄坡(1876-1948)と引き継がれた漢学塾・泊園書院に入塾。また書画家番付にもしばしば登場しており、昭和12年(1937)3月に益井文英堂より発行された「改訂古今書画名家一覧表」には、「現代閩秀各派名家」のひとりとして、その名が記載されている。青溪のもとでは多くの弟子たちが学んだといい、指導にも熱心であったと伝えられている。

大正5年の《青緑河橋新柳図》や個人蔵の《青緑山水図》など、大正前半期頃には最初の師である青蘭の画風をよく受け継いだ作品を描いているが、大正末から昭和初期にかけ、日本南画院展へ出品した作品では、日本の田園風景を題材に、近代的な感覚を取り入れた画風を展開させた。(T)

【主要参考文献】

横山俊一郎『泊園書院の人びと その七百二人』(清文堂、2022年)

No.13 2022年度新収蔵品

せいろく か きょうしんりゆう ず
青緑河橋新柳図

大正5年(1916)
絹本着色・軸
125.8×41.1cm
賛「一溪鵲散桃花雨兩岸鶯啼楊柳風」
款記「青溪女史池愛寫」
印章「池田愛印」白文方印、
「青溪」朱文方印、
「煙霞」白文長方印・関防印



のぐちしょうりん
野口小瀨 (1847-1917)

漢方医・松邨春岱(?-1862)の長女として大坂に生まれる。名は親子。字は清婉。はじめ玉山と号し、のち小瀨と改めた。8歳で四条派の画家・石垣東山(1804-76)に師事。その後、京都で日根対山(1813-69)に南画を、小林卓斎(1831-1916)に漢学を学び、明治4年(1871)に上京後、岡本黄石(1812-98)に漢詩を学ぶ。明治6年、皇后の御宸殿襖に花卉図を揮毫。明治10年には滋賀県で酒造業を営んでいた野口正章と結婚、翌7年、娘・郁(号・小蕙)が生まれる。明治15年、第1回内国絵画共進会へ《山水》《桂花》を出品、褒状を受賞。明治19年には東洋絵画共進会へ《二喬読兵書図》《花卉》を出品、前者が銅賞となり、宮内省御用品に選ばれる。また同会へ皇太后と皇后が行啓した際には、他の女性画家たちとともに御前揮毫を務めた。以後小瀨は国内外の各種展覧会へ出品し、受賞すること多数、御用品や御前揮毫の栄にもしばしば浴した。明治22年、華族女学校画学課授業囑託となる。明治27年には明治天皇・皇后の大婚25年に際し、枢密院官吏、内務省、会計検査院より依頼の献納画を揮毫。明治32年には東伏見宮妃と小松宮妃の画学教導を拝命する。明治35年、奏任待遇にて常宮内親王の御用掛となり、さらに周宮内親王と北白川宮満子女王の画学教導を拝命。明治37年には女性初の帝室技芸員に任命され、翌38年正八位に、41年従七位に叙せられる。大正4年(1915)には大正天皇の御大典で用いられる《悠紀地方風俗歌屏風》を揮毫した。(T)

【主要参考文献】

『没後100年 野口小瀨』展図録(山梨県立美術館、2017年)
仲町啓子監修・中村玲編『野口小瀨—女性南画家の近代—』(実践女子大学香雪記念資料館、2019年)

No.14 2022年度新収蔵品

せいろくちくりんさんすい ず
青緑竹林山水図

大正5年(1916)
絹本着色・軸
126.1×41.9cm
賛「密竹滴残雨高峯留夕陽」
款記「大正星次丙辰首秋寫於間雲
野鶴草堂小瀨」
印章「野親之印」白文方印、
「野氏清婉」朱文方印



ありもとよう こ
有元容子 (1949-)

1949年愛媛県に生まれる。1971年に東京藝術大学美術学部絵画科日本画を卒業。1977～80年に創画会展に出品、1978～79年には春季創画展にて春季展賞を受賞した。1994年以降、両洋の眼・現代の絵画展に毎年出品している。そのほかにも多くの展覧会に出品し、個展を多数開催している。

故郷である瀬戸内海の島々や全国の山岳風景を多く描いており、子供時代を自然に囲まれて過ごした影響が表れている。また、山に実際に登り、山岳風景をスケッチし、それらを作品として描きおこしている。1988～89年には唐津の隆太窯に内弟子として入り、陶芸を学ぶ。翌年には東京に戻り、岡本工房にて作陶を始め、その後、個展やグループ展において、絵画、陶芸作品を発表する。また、陶芸用の土や山の土を用いた絵画作品も発表している。

2006～12年まで、実践女子大学文学部美学美術史学科の教授として、絵画及び陶芸の分野で学生を指導し、美術科教員の育成に尽力した。共著に『花降る日』、『有元利夫 絵を描く楽しさ』があり、2021～22年には『愛媛新聞』のコラム「四季録」にエッセイを寄せた。(Y)

【主要参考文献】

『有元容子作品集』(平野古陶軒、2009年)
『有元容子日本絵画展 2014—山の風・海の風—』(三越伊勢丹、2014年)
有元容子「四季録」エッセイ(『愛媛新聞』、2021年4月～2022年3月)

No.15 2022年度新収蔵品

しま
島

2014年
紙本着色・額
89.8×115.6cm
右下に署名「容」

No.16 2022年度新収蔵品

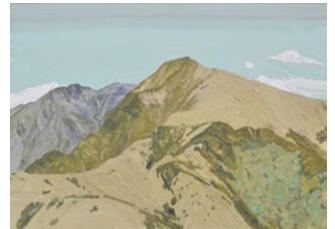
くらせ かしら
鞍瀬の頭

2016年
紙本着色・額
64.2×89.9cm
右下に署名「容」

No.17 2022年度新収蔵品

かいこまがたけ
甲斐駒ヶ岳

2019年
紙本着色・額
115.7×79.6cm
右下に署名「容」



《鞍瀬の頭》

[解説リーフレット]

第6回新収蔵品展

発行日：2023年5月20日

編集・発行：実践女子大学香雪記念資料館

〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49

HP：https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/

凡例

- ・本リーフレットは実践女子大学香雪記念資料館で開催した「第6回新収蔵品展」(2023年5月20日～6月11日)に際し、発行したものです。
- ・記載は作家名、作家解説に続いて、展示番号、新収蔵年度、作品名、制作年代、材質・技法、形状、寸法、賛、款記、印章、寄贈者情報を記し、一部の作品については図版を掲載しました。
- ・掲載の作品はすべて、実践女子大学香雪記念資料館蔵です。
- ・本パンフレットの編集は児島 薫(実践女子大学香雪記念資料館 館長)、田所 泰(同学芸員)が担当し、鈴木 美有(同事務職員 [学芸事務])、矢野 綾香(同臨時職員 [学芸補助])、赤地 理子(同臨時職員 [学芸補助])が補助しました。
- ・作家解説は、田所 (T)、鈴木 (S)、矢野 (Y) が執筆しました。